

林 檎

屋代 彰子

秋のお彼岸近くになると宗像特産・早生みかんの「姫神」ひめがみが店頭に並び、暑さの残る街に秋の貌がのぞく。ちょうどその頃、青森県産の早生リンゴ「サンつがる」が隣に並ぶ。なめらかでツヤツヤした紅い肌に黄色のスジがところどころに入る。リンゴの棚に添えられたカードは、この品種がゴールデンデリシャスを母親（めしべ）とし、紅玉を父親（花粉）として交配されたことを教えてくれる。大きな紅い実の生い立ちを知ると、なんとも愛おしい気持ちになり、さっそく一個買い求める。サクサクした歯ざわり、酸味と甘みもほどよく、爽やかな果汁が口いっぱいひろがる。

リンゴの食べ方、食べさせ方には色々ある。皮も食べられる数少ない果物だ。生はもちろんのこと、コンポーターのように砂糖液で煮ることもできる。くり抜いた芯に

バターと砂糖をつめて焼きリンゴにすると濃厚な香ばしさがあるし、アップルパイ、タルト、フルーツケーキのように、生地にはさんだり混ぜたりして焼き菓子の中に入れる方法もある。モンゴメリ『赤毛のアン』には、養父母に引き取られたアンがグリーンゲイブルズ（緑の切妻屋根）の家に来て初めて口にする食べものとして、マリラが果樹園のリンゴで作った砂糖づけが出てくる。そんな食べ方もあるらしい。そういえば、山登りにリンゴとレモンの砂糖づけを持って行くとバテたときに元気が出ると、親しい友人が話していた。子どもの頃、風邪で食欲のないときにきまってるリンゴの搾りおろしを母親に食べさせられたことを憶えている。長じて、札幌の友人宅のジンギスカン鍋で、リンゴの搾りおろしをつけ汁の中にたっぷり入れる方法を初めて知ったりもした。油っ

こい焼肉にびつたり甘酸っぱい風味はなかなかイケる。デザートで、薄く切ったリングゴにアイスクリームをのせるのも美味しい。リングゴの酸味とアイスクリームの甘味が口の中で溶け合って、小さなつむじ風がからだの中を一瞬吹き抜ける。

リングゴの味を初めて知ったのは、生後半年の頃だったらしい。それまでも母乳が足りなくて、もらい乳や粥の汁など、綱渡りの栄養補給があつたと母から聞かされた。粉ミルクなどは手に入らない昭和二十四年春。ようやく秋になってリングゴが出回ると、その摺りおろしをガーゼで濾し、しぼり汁を白湯で薄めて飲ませられた。その頃の品種は、「紅玉」か「国光」か。当時はこの二種類ぐら이었다はたはず。いま出回っている「ふじ」だの「スターキング」よりも酸味が強く、甘みが弱い。おそらく、砂糖を少し加えて飲まれたのではないだろうか。生まれて初めて口にする果物がリングゴだったというひとは多いだろう。もちろん本人の記憶にはないだろうけれど、舌は憶えているかもしれない。憶えているはずだ、命を救ってくれた母なる紅い実なのだから。

物語の食べものに興味を持ちはじめた気がついたのだが、果物の印象は弱い。すぐに想い出すのは海外の古い

物語に登場するリングゴだ。なぜか特別な意味を込めた、いわゆる「メタファー（隠喩）」としての扱いをされているところが面白い。

小学生の頃に読んだ世界児童文学全集第一巻『ギリシャ神話』の「トロイア戦争」には、戦争のきつかけとなつた「金のリングゴ」が登場。子供向けに書かれているとはいえ、ギリシャ神話には多くの神々が登場するので、話はやたらと複雑だ。記憶に残っているのは、後段のトロイの木馬のくだりであり、そのつぎが話の導入部に出てくる「金のリングゴ」である。ギリシャ神話書かれたのは紀元前のことだから、物語に登場するリングゴとしては一番古いかもしれない。「金のリングゴ」は、最もうつくしい女性の象徴としてまず登場するが、それを手にした美の女神アフロディテに唆されたトロイの王子パリスが、スパルタの王妃ヘレネを略奪することによってトロイア戦争は始まる。結局、「金のリングゴ」は、「不和をもたらず使い」とされている。

それから少し遅れて書かれたキリスト教の『旧約聖書』創世記のエデンの園。かの有名なリングゴの木が登場する。しかし創世記には、ただ、「善悪を知る木」と記されているだけである（日本聖書協会、一九五五年改訳）。その木がいつからリングゴにされたのか、理由は定かでない。

イブが蛇に唆されて食べたのはリンゴの実とされてきたし、イブに誘惑されて食べたアダムともども、二人は神によって重い罪を背負わされてエデンの園から追放される。エデンの園のリンゴの意味は、言わずもがなの「タブー(禁忌)」であり、それを犯すことによる「罪と罰」のメタファーでもある。『旧約聖書』には、それを食べると死ぬとまで書かれている。イブがリンゴに口をつけたがために、人類は死を免れることができなくなったのだろうか。

さらに下って、グリム童話(五三番)の「白雪姫」には「毒リンゴ」が使われる。老婆に化けた母親である王妃に売りつけられ、毒リンゴをかじった白雪姫は深い眠りにつく。グリム童話の原作では、白雪姫は王妃によって二回殺されそうになるが、三回目極めつきの凶器が毒リンゴなのである。しかしそのお陰とっていいだろう、白雪姫は王子様に救われて、めでたし、めでたしの結末を迎える。つまりリンゴは、物語に劇的な展開をもたらすための仕掛けになっているとも読める。

これら三つの古い物語の中のリンゴは、「魔力」あるいは「悪意」を象徴する不吉な食べものとして登場している。リンゴ栽培の歴史は四千年前のヨーロッパにさかのぼるとされる。ブドウと並んで人類と最もつき合いの長

いありふれた果物に他ならない。

リンゴはなぜ悪者にされるのだろうか。そのタネにアミグダリンという青酸配糖体の含まれることを知ることだろうか。毒をもつその物質がウメ、ビワ、アンズ、ナシなどの未熟な果実やタネにも含まれていることは、今ではよく知られている。ふだんの縦切りと違うかもしれないが、リンゴの真横にナイフを入れて輪切りにしてみてもほしい。中央に星形の空洞がある。その一つ一つの尖った部分に、焦げ茶色した二粒のタネが入っている。一個のリンゴにつき十粒のタネ。もし、リンゴを芯のまま食べたとしても心配するほどのことはない。しかし古代の人々は、リンゴの实の最奥に含まれる「毒」の存在に、あながい気づいていたのかもしれない。

日本の物語に果物は登場してきただろうか。記憶にあるのは、芥川龍之介『蜜柑』や梶井基次郎『檸檬』。なぜか両方とも柑橘類で、主人公の心象風景を表す重要なものとして描かれている。いっぽう、みかんの皮を剥く、ブドウをつまむ、リンゴやモモやオレンジを切って食べるシーンなどを描いた作品は記憶にない。その理由のひとつには、小説の場面に家庭の台所や食卓の描かれることが少ないからかもしれない。しかし、唯一といってよ

いだらう、幸田文は、小説の中にリングを描いている。

『流れる』にはリングの砂糖煮が登場する。作者・幸田文がヌツと素顔を晒しているようで、彼女自身の生活感と心情がむき出しになっているのである。この場面を何回読んだことだろう。読むたびにその情景は胸に迫ってくる。

主人公の梨花は夫と子どもを亡くした四十過ぎの女で、傾きかけた芸者置屋の女中として住み込みで働きはじめる。持ち前のさっぱりした気性と気転の利く確かな頭で、置屋の主人や芸者たちの細々とした暮らしを支える。置屋に居候を決め込んでいる主人の姪には、不二子という「高慢こまちやくれた」手におえない幼い娘がいる。たびたび高熱を出すので「医者だ氷だ」と、だらしない母親に代わって梨花は走り回る。買い物帰り、「林檎」のツヤツヤした肌が目に入り、梨花はかつて自分が母親だったときの記憶を甦らせる。

これを砂糖で煮てつめたくしてやたらと、ぽとぽと汗を流して喘いでいる不二子を思う。梨花の子どもがかつて幼く病弱だったころ幾度この林檎を煮てやったらう。紅い林檎を白く剥いて煮ると甘酸っぱい匂いが立って、果肉は夢のように柔らかく、砂糖の

煮汁は重く透明になる。それを氷に冷やして、きらきら光る匙に取ってやると、うつつのようになって熱の子どもは乾いた唇を明ける。「おいしい」と云ったつけ。
〔流れる〕

梨花はリングを一個二十円で買い、不二子のために砂糖煮を作る。不二子は、「これなあに？ うまい」と云って、珍しそうにして食べる、のである。不二子のために買ったリングは小さな紅玉だったのかしら……。一個の林檎が描く幸田文の世界は、この物語の核心とも言える。

春遅く、リングは桜のような薄紅色の花をつける。十二歳の「赤毛のアン」は、その花が道の両側に咲き乱れる光景を「歓喜の白路」と名づけ、新しい生活の門出をリングとともに祝った。リングは世界中どこにでもあるありふれた果物だけれど、その花と実には、人間をふるい立たせて運命を切り拓いていく力を与えてくれる何か、潜んでいるのかもしれない。